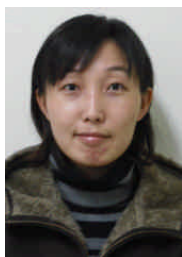




2010年 日本在学の留学生事情

新年おめでとうございます。第2号は母国を離れて日本で美術の教育や表現を学ぶアジアの留学生に焦点をあてます。言語の壁に挑み、世界的な不況下での経済的自立を図りつつ研究に取り組む

姿には心を打たれます。留学を契機に母国と日本の諸状況を相対化し、従前の思考を越えて国家・民族・個人や市場の将来を見据えた不安・希望・展望が綴られた記事を是非ともご高読ください。



来日しデザイン研究から 美術教育研究へ

■ 特日格勒（トリゲル）
茨城大学教育学部研究生

私は、中国モンゴル自治区にいたときから日本のデザインにあこがれていました。私が卒業した内モンゴル大学で学習したデザイン課程とは違う素晴らしい作品が、日本にはいっぱいあったからです。デザイン専攻だった私にとって、それらはとてもよい教材になりました。日本人のデザイナーである福田繁雄、奈良美智ほかの作品を見て、よいデザインにめぐまれた環境の日本に留学して勉強したいと思いました。それで2007年来日し、美術専攻の研究生として岡山大学教育学部に入学しました。

ところが、この2年間、研究生をしているうちに、考えが変わりました。私が学んできた岡山大学の教育学部は、将来の教員を養成するところです。私は日本の教育を受けるうちに、なぜ日本のデザインが素晴らしいのか、なぜ日本の製品は壊れにくく作ってあるのか、なぜ日本の製品は世界中の人々から受容されるのかなどの疑問をもつようになりました。そして、これはデザイン研究の問題だけではなく、日本の教育によるものであると考えるようになりました。日本では、先生方と

学生たちはコミュニケーションをしながら切磋琢磨しています。また、日本の小学校から大学までの教育システムに美術教育理念と方法が、日本人の考え出すデザイン性を高度なものにしているのではないかと、とも思いました。私は、日本でデザイン研究をするよりも美術教育を研究して、それらの重要性を認識したいと考え、茨城大学の向野康江先生の研究室の研究生になりました。

私が中国にいたときに受けた美術教育とは、先生が絵を描く方法を教えるだけで、ほとんど詰め込むだけの教育でした。つまり、学習者が綺麗に描く、うまく描けることを一番重視していました。茨城大学では学部生の授業を受けたり、大学院のゼミに参加したりして、日本の美術教育は学生たちの豊かな発想と創造力を養う教育であることがわかりました。

そのような教育を数年間受け続けた私は、日本の学生たちの作品を見たとき、あまり上手ではないと感じました。けれども、日本の美術教育を受けるとともに、祖国での美術教育が大きな間違いであると思うようになりました。日本に来た直後は、なぜ日本の社会には犯罪が少ないのか、なぜ日本人が世界第二の経済大国になったのか、なぜ日本のつくった電化製品が世界中で人気があるのかなど、いろいろ疑問をもっていました。そのうち、その要因は日本の教育によるものであると思うようになりました。

日本の美術教育は子どもの発想を生かしている

教育だと考えられます。発展が著しい中国でも、新しい学校教育概念と方向と定めた「美術課程標準」を2001年に公布しています。その「美術課程標準」は、日本の「学習指導要領」を参考にしてつくられたといえます。この中で「美術課程標準」は中国美術教育が現代化と国際化に向かって発展する要求に対応し、新たな教育理念、教材、および学習の方式を提唱しています。しかし「美術課程標準」の目指す理想と現行の美術教育の間には大きな格差があり、多くの問題点が依然として存在しています。例えば、

- ①教師主導型の教育環境、知識や技能を過度に強調、子どもの創造性と個性を抑制する。
- ②ある学校では美術教育の重要性への認識が足りず、授業時間数を減らす。
- ③都市と郷土美術教育の格差が大きい。

など教材研究の中で解消できない厳しい状況も見られます。以上の問題は氷山の一角です。一方、日本では特色がある教育を展開し、児童生徒に自ら学び自ら考える“生きる力”を育むことを重視しています。このような特徴は中国の美術教育の問題に対して改善の方向性を与えてくれるだろうと思われま

す。私が研究課題をデザインから美術教育へと更新した理由は、中国の美術教育の歴史的発展と現状に対する分析をふまえて、中国美術教育を深く研究している向野康江先生の指導を受けながら新しい中国の美術教育の方向を示し、日本美術教育の実態から中国が新しく目指す理想的な美術教育の方法を探し、教材開発研究を行いたいからです。ただし、私はモンゴル民族出身ですから、中国といたながらも民族的な要素も手放したくないのです。(2010年度、茨城大学大学院教育学研究科に入学予定)

日本の美術教育研究と 自らの指導力の向上をめざして

■ 劉 麗麗
福島大学大学院生

私は、中国吉林省から日本の美術教育研究とともに自らの指導力の向上を目的に、2008年4月に来日しました。初年度は福島大学の研究生として教育学を研究しながら日本語を学びました。一年間の努力の甲斐があって、本年4月より福島大学大学院人間

発達文化研究科教育実践領域に入学できました。

現在の中国では、美術科教育が総合的な教育であるという考え方や意識、また主張が足りないという大きな問題を抱えており、学校における美術教育は厳しい状態にあると思います。日本では、ゆとりある教育の中で、人間の想像力・表現力および問題解決力を育みながら、すばらしい人材を育成できていると感じています。日本の美術教育理論を学びながら、教育現場にも足を運び、学校教育の現状や美術科教育の具体的な考え方と方法、特に、造形性を重視した美術科の指導実践およびその教材について詳しく調査研究をしたいと考えています。そして、中国の状況と比較しながら、双方の長短所を見つけ、中国の美術教育を補うことができる研究を目指したいと思います。

来日後1年半を経過した現在でも、日本語と中国語との表現方法が異なるため、日本語によるコミュニケーションが十分に果たせているとは言えません。私からのメッセージがよく通じていないと思うことも多々あります。特に授業での発言やゼミの発表では、とても不便を感じています。修士論文執筆に向けて、まだまだ日本語の勉強が課題かもしれません。

先生方やクラスメートのみなさんは、とても優しくしてくれます。私のことにいつも関心をもってしてくれます。言葉で困ったときなどは、クラスメートが通訳してくれます。また、自分の日本語が通じていないと思う時は、漢字で書いてくれたりもします。ただ、中国語漢字と日本語漢字はとても似ていますが、その意味がまったく違っていることも多いため、相互理解に苦勞する場面もたびたびです。

日常生活の中で、日本文化を徐々に理解できるようになり、簡単な日本料理も習得することができました。昨年は、スーパーマーケットでアルバイトをしながら、中国人にとっても人気がある寿司の作り方を教わりました。合理的な食材を組み合わせ、健康的な体を維持する心がけは当然のことですが、日本人は健康管理とバランスよい栄養の摂取をとても重視していると感じています。私の日本語力では、十分に日本の食文化情報は得られません。そのため、食品を扱うアルバイトは、とても大変でした。しかし、職場の日本人スタッフのみなさんは、優しく手ほどきしてくれました。また、いろいろな日本文化の教育もしていただき、楽しく仲良く付き合うことができました。

大学院修了後は、母国に帰り教職に就くことを希望しています。現在すすめている「中学校美術教育における指導と評価についての日中比較研究」は、帰国後に、中国での教育や学習認識を大きく改善す

る研究になると思われます。日本の教育状況を知覚的かつ感覚的に俯瞰して認識を深めるとともに、今後は母国の教育改善の課題意識を明らかにさせていくつもりです。帰国後に優秀な教員として活動できることを夢見ています。これからも日本で体験することは、私の財産であり、母国での教材でもあります。そして、今後も自らの研究を永く続けていけるよう美術教育に関する認識を深め、日本の開放的な教育方法を生かして、美術家や美術の愛好家を多く育てたいと思っています。



日本の美術教育に 何を求め、何を学ぶか

■ 王 岩
岩手大学大学院生

私は 2004 年から岩手大学教育学部芸術文化課程造形コースで美術を学習してきました。大学 2 年生の時、同級生より 1 年ぐらい早めに彫刻研究室に入って本格的彫刻の研究を始めました。大学卒業後、知識をもっと深くしたいと考え、岩手大学大学院教育研究科教科教育専攻に入学し、彫刻の研究をしています。現在、大学院の 2 年生です。

私は留学生活を通じて、彫刻制作を軸として日本と中国の関係性を感じてきました。日本は世界で極めて魅力のある国だと思えます。長い歴史、文化をもつ奈良や京都だけでなく、陸奥にある平泉も美しい町です。中尊寺や金色堂の風景、歴史的な話題やその仏教文化などに感動し、何度も見学に行きました。ところが、日本の歴史や文化などに触れるときに、中国とも深い関係があり、もしかしたら中国の大陸の奥の共通文化の根源があるかもしれないと感じました。自分の五感で先祖の世界に触れたいと思っていました。私はこれまでに研究上、中国の世界遺産や博物館など 40 ヶ所を訪れました。古代の美術遺産は私の制作の手本になりました。例えば、山に彫られた数千も洞の中から蜂の巣のような「龍門石窟」と漢の時代の「打虎亭漢墓」に想を得て「空」という作品を制作しました。このような研究と制作を繰り返し、彫刻についての考えが次第に深くなり、色々なことを感じられるようになりました。古代の人はこつこつとした努力の上で、知恵を重ね、素晴らしい作品や文化を現代に残しています。先人の美術遺産の魅力を鑑賞しつつ、未来へと伝えられる悠

久な美を追究するという重大な責任が現代の私たちにはあると思います。現在の研究課題は、中国古代の造形と現代との融合の模索をしながら、彫刻における新しい表現を創造することです。

私は、今まで盛岡で 5 年半研究してきました。愛するこの町がこれからどう発展していくか深く関心を持っています。私は岩手大学から盛岡彫刻シンポジウムに参加し、より多くの作家と共同制作を行い、斬新な造形の在り方を探求し続け、盛岡の環境の中における造形計画がどうなっていくべきかを考え、地域の人々の声を聞きながら、活動しています。帰国後、私は現在でも参加している盛岡彫刻シンポジウムを大連で紹介し、制作の場を提供したい。

毎年のように大きな芸術イベントが、欧米諸国で行われてきました。近年、中国をはじめアジアは安定した政治状況下で経済が加速的に発展してきました。特に、最近「アジア共同体」の構想が出されました。そのため芸術は発展し、安定した大きな市場が提供されると思います。これから美術は日本と中国の文化の中心になると信じて、さらに両国の文化の深い繋がりを研究しつつ、彫刻の表現活動を展開していきたいと考えます。

私が心配していること

■ 金 日峰
茨城大学教育学部 4 年生

私の実家は中国の吉林省にあります。私は朝鮮民族です。日本語は中国にいるときから学習しました。私たちの故郷の学校では、日本語と英語のどちらを選択することになっています。私は中国の高等中学を卒業するとすぐに砂糖工場につとめました。しかし、働いているうちに日本の大学で学びたくなり、最初は北海道教育大学の研究生をしていました。茨城大学の教育学部に合格してから、油絵具による労働者の姿を表現するために、人体の研究をしています。

日本では、たくさんの表現技法がありますが、中国の絵画は、浙江省や上海を中心とした柔らかい画風と中国東北部や北京を中心とするロシアの写真的なかたい絵とだいたい二つに分かれています。私の絵はどちらかと言うと、北京の画風に似ています。せっかく日本へ留学して来たのだから日本の画風も取り入れたいと考えていますが、なかなか思うようにはいきません。今、大学院進学

を目指して努力していますが、アルバイトが少なく困っています。日本で画材を買うと高いので、中国から船で運んでもらって、取り寄せています。東京へ出て、これから博士課程まで修了すると、

私は 40 歳になります。それまで結婚できるかどうか心配しています。(教育学部教員養成課程学校教育美術専修)

■平成21年度 第2回国際交流委員会報告

日時：2009年9月25日(金)13:30～14:25

場所：ナディアパーク国際デザインセンタービル
6F 共同研究会議室



出席：写真左から鈴木幹雄／神戸大、向野康江／茨城大、山口喜雄／宇都宮大、煤孫康二／岩手大、池内慈朗／埼玉大(撮影)

議事：次の4点について協議し、決定した。〔注：後日、全委員へのメールによる稟議にて了承〕

1) 『国際交流情報』を創刊し、刊行時の委員全員が執筆した。第2号は12月頃に発行の予定で、10月15日締切で企画を進行させたい。今回はくアジア地区」に焦点をあて、留学生などにも原稿を依頼する。〔注：学会通信の発行延期にあわせ、原稿募集および編集の期間を延長した〕

2) 本委員の任期を3年とし、特別な理由がない限り再任を妨げないこととする。学会総会での報告後に欠席の委員へのメールによる稟議で了承を得て任期を確定する。

3) 委員を若干名増やし、15名程度とする。中国・韓国等のアジア担当3～4名、米国・北米2名、中南米2名、英・仏・独・伊・露・欧州他担当計6名、アフリカ・オセアニア2～3名とする。なお、希望者は本委員会活動に関連する業績を本委員会に提出し、委員会にて審査の上、決定する。

4) 2010年9月上旬に中国・鄭州方面で5泊6日前後の日程で、現地の小学校にて図画工作の授業を行う企画を検討している。希望者・推薦者は、委員長の子山口喜雄宛 nobuoya@cc.utsunomiya-u.ac.jp にメールで申し込む。〔涉外：向野康江／その後想定していた地域の状況に変化があり、本情報発

行時点では地域や日程等が確定できていない〕

備考：註を除く上記の内容は、9月27日(日)12:00～13:40開催の大学美術教育学会総会にて報告し、了承された。〔以上、記録：煤孫康二〕

《 国際交流委員 》募集中

大学美術教育学会の会員の中から、国際交流委員会の委員を募集します。現在、担当が手薄な地域は、欧州の伊・露など、中南米、アフリカ・豪などです。委員の希望者または推薦者は、本委員会活動に関連する業績をご用意の上、山口喜雄宛 nobuoya@cc.utsunomiya-u.ac.jp にご連絡ください。

「特集」案・記事のご応募を!

ご意見・ご感想、次号「特集」のご提案、記事や執筆者のご推薦やご応募もお待ちしています。迷惑メールとの区別のため「■国際交流情報■」と見出しをつけて送信をお願いいたします。

■ 国際交流情報編集後記 ■

■『国際交流情報』第2号の編集にあたり、率直な気持ちや大志を無償で執筆してくださった4名の留学生に深謝いたします。また、運営にいつも協力してくださる各委員、とりわけ担当留学生に原稿執筆のご指導をいただいた煤孫委員と向野副委員長、福島大の天形健会員のご協力、ありがとうございました。日本に在学中の留学生のみなさんの更なるご活躍を祈念しております。

■本誌は大学美術教育学会活動の一環として発行し、編集内容の確認や指導を受けているので理事長名を発行者として冠しました。また、試行として第2号はカラー印刷にてお届けいたします。(2010年初春)

山口喜雄：宇都宮大学

nobuoya@cc.utsunomiya-u.ac.jp